当世女装一斑

泉鏡花

青空文庫

こゝに先づ一個の裸美人ありと仮定せよ、一代女に記したる、（年紀は十五より十八まで、当世顔は少し丸く、色は薄花桜にして面道具の四つ不足なく揃ひて、目は細きを好まず、眉濃く、鼻の間せはしからず次第高に、口小さく、歯並あら〳〵として皓く、耳長みあつて縁浅く、身を離れて根まで見透き、額はわざとならず自然の生えどまり、首筋立伸びて後れなしの後髪、手の指はたよわく長みあつて爪薄く、足は八文三分に定め、親指反つて裏すきて、胴間常の人より長く、腰しまりて肉置逞ましからず、尻付豊かに、物腰衣裳つきよく姿に位備はり、心立おとなしく女に定まりし芸優れて、万に昧からず、身に黒子一も無き、）……曲線に依りて成りたちたる一個の物体ありとして、試みに渠が盛装して吾人に見ゆるまでの順序を思へ、彼女は先ず正に沐浴して、其天然の麗質玉の如きを磨くにも左の物品を要するなり、曰、

手拭、垢擦、炭（ほうの木）、軽石、糠、石鹸、糸瓜。

これを七ツ道具として別に鶯の糞と烏瓜とこれを糠袋に和して用ふ、然る後、化粧すべし。

白粉、紅

の二品あり、別に白粉下といふものあり。さて頭髪には種類多し、一々枚挙に遑あらず、今本式に用ゐるものを

島田、丸髷

の二種として、これを結ぶに必要なるは、先づ髷形と髷となり。髷にたぼみの小枕あり。鬢みの、横みの、懸みの、根かもじ、横毛といふあり、ばら毛といふあり。形に御殿形、お初形、歌舞伎形などありと知るべし。次には櫛なり、差櫛、梳櫛、洗櫛、中櫛、鬢掻、毛筋棒いづれも其一を掻くべからず。また、鬢附と梳油と水油とこの三種の油必要なり。他に根懸と手絡あり。元結あり、白元結、黒元結、奴元結、金柑元結、色元結、金元結、文七元結など皆其類なり。笄、簪は謂ふも更なり、向指、針打、鬢挟、髱挟、当節また前髪留といふもの出来たり。

偖て島田なり、丸髷なり、よきに従ひて出来あがれば起ちて、まづ、湯具を絡ふ、これを二布といひ脚布といひ女の言葉に湯もじといふ、但し湯巻と混ずべからず、湯巻は別に其ものあるなり。それより肌襦袢、その上に襦袢を着るもの、胴より上が襦袢にて腰から下が蹴出しになる、上下合はせて長襦袢なり、これに半襟の飾を着く、さて其上に下着を着て胴着を着て合着を着て一番上が謂はずとも知れ切つて居る上着なり。帯の下に下〆《したじめ》と、なほ腰帯といふものあり。また帯上と帯留とおまけに扱といふものあり。細腰が纏ふもの数ふれば帯をはじめとして、下紐に至るまで凡そ七条とは驚くべく、これでも解けるから妙なものなり。

さて先づ帯を〆め果つれば、足袋を穿く下駄を穿く。待て駒下駄を穿かぬ先に忘れたる物多くあり、即ち、紙入、手拭、銀貨入、手提の革鞄、扇となり。まだ〳〵時計と指環もある。なくてはならざる匂袋、これを忘れてなるものか。頭巾を冠つて肩掛を懸ける、雨の降る日は道行合羽、蛇の目の傘をさすなるべし。これにて礼服着用の立派な婦人一人前、粧飾品なり、衣服なり、はた穿物なり、

携帯品なり、金を懸くれば際限あらず。以上に列記したるものを、はじめをはり取揃へむか、いくら安く積つて見ても……やつぱり少しも安からず、男子は裸百貫にて、女は着た処が、千両々々。

羽織、半纏、或は前垂、被布なんどいふものの此外になほ多けれどいづれも本式のものにあらず、別に項を分ちて以て礼服とともに詳記すべし。

肌着

最も膚に親しき衣なり、数百金の盛装をなす者も多くは肌着に綿布を用ふ、別に袖もなし、裏はもとよりなり、要するにこれ一片の汗取に過ぎず。

半襦袢

肌着の上に着す、地の色、衣の類、好によりていろ〳〵あらむ。袖は友染か、縮緬か、いづれ胴とは異なるを用ふ、裏なき衣なり。

長襦袢

半襦袢の上に着く、いはゆる蹴出しの全身なり。衣服の内、これを最も派手なるものとす、緋縮緬、友染等、やゝふけたる婦人にてもなほ密かにこの花やかなるを着けて思出とするなり。蓮歩を移す裾捌にはら〳〵とこぼるゝ風情、蓋し散る花のながめに過ぎたり。紅裙三尺魂を裏むいくばくぞや。

蹴出

これ当世の腰巻なり。肌に長襦袢を着ることなるが、人には見えぬ処にて、然も端物の高価なるを要するより経済上、襦袢を略して半襦袢とし、腰より下に、蹴出を纏ひて、これを長襦袢の如く見せ懸けの略服なりとす、表は友染染、緋縮緬などを用ゐ裏には紅絹甲斐絹等を合す、すなわち一枚にて幾種の半襦袢と継合はすことを得、なほ且長襦袢の如く白き脛にて蹴出すを得るなり、半襦袢と継合はすために紐を着けたり、もし紐を着けざるには、ずり落ざるため強き切を其引纏ふ部分に継ぐ。

半襟

襦袢の襟に別にまたこれを着く、三枚襲の外部にあらはるゝ服装にして、謂はば一種の襟飾なり。最も色合と模様は人々の好に因る、金糸にて縫ひたるもあり、縮緬、綾子、絽、等を用ふ。別に不断着物及び半纏に着くるもの、おなじく半襟と謂ふ。これには黒繻子、毛繻子、唐繻子、和繻子、織姫、南京黒八丈、天鵞絨など種々あり。

下着

三枚襲の時は衣地何にても三枚皆整ふべきを用ふ。たゞの下着は、八丈、糸織、更紗縮緬お召等、人々の好みに因る、裏は本緋、

新緋等なり。

合着

これも下着と大差なし、但し下着もこの合着も一体に上着よりは稍派手なるを用ゐるなり。

上着

衣の地は殆ど枚挙に遑あらず。四季をり〳〵、年齢、身分などにより人々の好あらむ、編者は敢て関せざるなり。

比翼

一体三枚襲には上着も合着もはた下着も皆別々にすべきなれども、細身、柳腰の人、形態の風にも堪へざらむ、さまでに襲着してころ〳〵見悪からむを恐れ、裾と袖口と襟とのみ二枚重ねて、胴はたゞ一枚になし、以て三枚襲に合せ、下との兼用に充つるなり、これを比翼といふ。甚だ外形をてらふ処の卑怯なる手段の如くなれども比翼といへばそれにて通り、我もやましからず、人も許すなり。

腰帯

衣服を、はおれる後、裾の長きを引上げて一幅の縮緬にて腰を緊め、然る後に衣紋を直し、胸襟を整ふ、この時用ゐるを腰帯といふ、勿論外形にあらわれざる処、色は紅白、人の好に因る、価値の低きはめりんすもあり。

下〆《したじめ》

腰帯を〆めてふくらみたる胸の衣を下に推下げたる後、乳の下に結ぶもの下〆《したじめ》なり、品類は大抵同じ、これも外には見えざるなり、近頃花柳の艶姐、経済上、彼の腰帯とこの下〆とを略して一筋にて兼用ふ、すなわち腰を結びたる切の余を直ちに引上げて帯の下〆にしたるなり。其腰と帯との間にとき色縮緬など下〆のちらりと見ゆる処、頗る意気なりと謂ふものあり。

帯

一寸の虫にも五分の魂、其の幅八寸五分にして長八尺ばかりなるもの、これ蓋し女の魂なり。さても魂の大きさよ。蜿蜒として衣桁に懸る処、恰も異体にして奇紋ある一条の長蛇の如く、繻珍、西陣、糸綿、綾織繻珍、綾錦、純子、琥珀、蝦夷錦、唐繻子、和繻子、南京繻子、織姫繻子あり毛繻子あり。婦人固くこれを胸間に纏うて然も解難しとせず、一体品質厚くして幅の広きが故に到底糸を結ぶが如く、しつかりとするものにあらねば、このずり落ざる為に、

帯揚

を用ふ、其背に於て帯をおさふる処に綿を入れ、守護を入れなど

す。縮緬類をくけたるなり。また唯しごきたるもありといふ。引廻して前にて結び、これを帯に推込みて仄かに其一端をあらはす、衣と帯とに照応する色合の可なるものまた一段、美の趣きあるあり。

帯留

帯揚を結びて帯をしめたる後、帯の結めの下に通して引廻し、前にて帯の幅の中ばに留む、これも紐にて結ぶあり、パチンにて留むるあり。この金具のみにても、貴重なるものは百金を要す、平打なるあり、丸打なるあり、ゴム入あり、菖蒲織あり、くはしくは流行の部に就いて見るべし。

扱帯

帯留の上になほ一条の縮緬を結ぶ。ぐるりとまはしてゆるく脇にて結ぶもの、これを扱帯といふなり。多くは桃割、唐人髷時代に用ふ。島田、丸髷は大抵帯留のみにて済ますなり、色は人々の好に因る。

浴衣

浴衣は湯雑巾の略称のみ。湯あみしてあがりたる後に纏ふゆゑにしか名づく。今木綿の単衣をゆかたといふも、つまり湯上りの衣といふことなり。

湯巻

奉仕御湯殿之人所着衣也　白絹也　と侍中群要に見えたりとか。貞丈雑記に、湯を召さするに常の衣の上に白き生絹、其白き生絹の衣を、湯巻ともいまきともいふなり。こは湯の滴の飛びて衣を濡すを防ぐべきための衣なり、とあり。俗に婦人の腰に纏ふ処の

湯具

といふものを湯巻といふは違へりとぞ。今の湯具は古の下裳に代用したる下部を蔽ふの衣なり。嬉遊笑覧に、湯具といふは、男女ともに前陰を顕して湯に入ることはもとなき事にて必ず下帯をきかえて湯に入るゆゑ湯具といふ。古の女は、下賤なるも袴着たれば、下裳さへなく唯肌着を紐にて結びたり。これをこそ下帯とはいふなりけれ。伊勢物語に、「二人して結びし紐を一人して相見るまでは解かじとぞ思ふ」思ふに下裳は小児の附紐の如く肌着に着けたる紐なるべし。或は今下じめといふものの如く結びたるものならむか。応永に書きたる日高川の絵巻物には、女、裸にて今の湯具めくものを着けて河に入らむとする処を写せり、恐らくこれ下裳なるべし、とおなじ書に見ゆ。湯具に紐つけることはむかしは色里になかりしとぞ。西鶴が胸算用に（湯具も木紅の二枚かさね）と云々あはせて作りたるものありしと見えたり。ともかくも湯具と湯巻は全然別物なりと知らるべし。紫式部日記に、ゆまきすがた、といへるは、豈腰にまとふに布のみを以てしたる裸美人ならむや。

襦袢

源氏枕草子等に、かざみといへるもの字に汗衫と書くは即ちいまの襦袢なり。汗取の帷子とおなじき種類にして直ちに肌に着る衣なり。今人々の用ふるは半衣にして袖口を着く、婦人にはまた長襦袢あり。

犢鼻褌

木綿の布六尺、纏うて腰部を蔽ふもの、これを犢鼻褌と謂ふ。越中、もつこう等はまた少しく異なれり。長崎日光の辺にて、はこべといひ、奥州にてへこしといふも、こはたゞ名称の異なれるのみ。また、たふさぎといふよしは、手にて前を塞ぎ秘すべきを、手のかはりに布にておほふゆゑにいふなりとぞ。（何うでもいゝ。）

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆38　装」作品社
　　1985（昭和60）年12月25日第1刷発行
　　1999（平成11）年10月20日第13刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第二十八巻」岩波書店
　　1942（昭和17）年11月30日
※修正箇所は底本の親本を参照しました。
入力：門田裕志
校正：土屋隆
2008年12月1日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

当世女装一斑

泉鏡花

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/